

図書館通信 —63—

1983. 4

図書館関係諸規則の改正に寄せて

附属図書館長 細井 寅三

昭和58年4月から「附属図書館規則」の一部が改正され、それに伴って従前の「閲覧規程」が廃止され、新たに「利用規程」が制定された。そして、その規程のもとに、本館と浜松分館のそれぞれに「閲覧の手続等に関する細則」が設けられた。

今回このような改正が行われるに至った最も大きな理由の一つは、図書館の利用形態の拡大多様化に伴って、従前の規程では業務の運営に支障をきたす恐れが生じたということである。すなわち、従前の「閲覧規程」は、閲覧に関する基本的事項から日常の窓口業務の手続事項までを規定し、実態をやや異にする本館と浜松分館を包括するものであったがゆえに、それぞれにおける実際の運用が規程の定めるところと必ずしも合致しなくなり、それに適合させるための改正ができない状態にあった。加えて、今後に予想される図書館業務の電算化によって利用形態が更に変化し、その弊が一層大きくなる恐れも感じられた。

省みて大学図書館は、学生用図書費の予算制度にみられるように、専ら学習（教育）機能に重点が置かれ、いま一方の重要な柱である研究機能についてはほとんど省みられない状態にあった。近年に至って、漸く大学図書館の果たすべき研究機能に関心が向けられるようになり、学術情報システムの構想によって、それへの認識が一段と高まった。すなわち、5、6年前ごろからスタートした拠点大学における自然科学系分野別外国雑誌の集中購入、全国国立大学における自然科学系外国雑誌の購入、人文社会科学系分野における大型資料の購入などに対する予算化や、また、全国国立大学図書館間相互利用制度の発足などは、いずれも大学図書館を研究図書館として位置づける方向のものであった。そして、今日着々として実現化されつつある学術情報システムの構想は、大学図書館が、今後、情報検索の窓口およびターミナ

ルの機能、一次情報の収集・提供の機能、所在情報の形成・検索の機能を通して、研究図書館としての役割を果たすべきであることを明示した。

大学図書館における研究機能の重視が、学習機能の軽視につながるものでないことは言うまでもないが、静岡大学図書館が、今後研究機能を確立するに当たって、その構想をいかにもつべきかを早急に全学的な立場で検討する必要があるように思われる。すでにいくつかの大学で、学術情報システムの在り方についての検討が全学的に行われ、また、かなりの大学図書館で電算化が実現している現状にある。

大学図書館における研究機能の拡大に伴って、図書館の利用形態が変化することは当然予測されるところである。従前、本学の「図書館規則」では、「図書館資料の閲覧」に重点が置かれ、「図書館資料の複写」とともにそれぞれ別条でうたわれていたが、今回これを1条にまとめて「図書館の利用」とし、これらを含めた図書館機能にかかる利用のすべてを包括した形に改められた。これを受けて利用の基本的事項のみを規定した「利用規程」が新たに制定され、更にそのもとに本館と浜松分館に別々に細則が設けられて、それぞれの実態に即応して改正が行われ得るような体制が築かれた。今回のこのような一連の改正が、今後の図書館運営の円滑化と利用の拡大に少しでも役立てばと念願する所である。

◆ライブラリー・オリエンテーション◆

図書館利用案内

期間：4月14日(木)～4月27日(水)

時間：[1]午後1:30～ [2]午後3:30～

所要時間：毎回約40分

場所：図書館6階東側 視聴覚室

増築成った新しい浜松分館

浜松分館長 大月卓郎

「図書館通信 55号」でお知らせした分館増築の昭和 57 年度概算要求が認められ、この 3 月その工事が完了しました。増築の目的は、これまでの学習図書館としての機能充実に加えて、学術雑誌の集中、学術情報システムへの利用を核とした研究図書館としての機能の確立でした。幸い関係部局の御協力を得て、大学の附属図書館として、車の両輪が揃った理想的な姿への第一歩を踏み出すことができそうです。以下の案内を御覧の上、十分活用していただくことを願ってやみません。

1. フロア構成

(1) 浜松分館は既設部が 2 層から成っており、新設部もこれに合わせて 2 層とした。これまでの学習図書館の機能に、さらに研究および総合(レファレンス他)の機能を加えるため、フロア構成は各機能の有機的・立体的な結びつきが重要になる。各資料群の数量、その配置のための面積および利用者の数と動線、資料群と利用者の接点に立つ事務管理部門の諸要素を考慮して、フロア構成が定められた。

(2) 既設部の手直しを極力抑えながら、新しいシステムを作るという条件のため、管理部門である事務室および受付カウンター等は従来のままとした。そこを起点とする考え方に立ち、レファレンスツール(参考図書・目録類)をその近くに配置した。次に、学習機能の中心となる開架図書と閲覧座席の位置を 1 階新設部に決定した。学習機能を 2 階にという考え方も提示されたが、参考図書類との資料的つながり、必要面積、利用者の動線などから 1 階を当てることとなった。

(3) 研究図書館としての機能は、配置すべき資料の数から、2 階のすべてを当てる必要があった。しかし、学術雑誌(特にバックナンバー)を閲覧用(開架)と保存用(閉架)とに、いかに区分するかは現段階では判定しがたい。開架スペースをできるだけ広く確保しておき、今後の運用に判断を委ねたい。

2. 閲覧エリアの個別紹介(配置図参照)

<1 階>

(1) 開架図書エリア 新設部で南側、東側に大き

な窓をとって明るい室づくりを目ざした。中央部に約 26,000 冊収容できる書架を置き、その周囲に約 65 の閲覧座席を配置した。

(2) 参考図書エリア 既設部の中庭に接するあたりを中心に、約 2,800 冊収容できる参考図書用の低書架と約 30 の座席を配置した。(1)と(2)は実際には連結した空間である。学習用のハンドブック・事典等もすべてここに配架してあるので、両エリアを有効に活用していただきたい。

(3) グループ学習室 開架図書エリアの南西部に間仕切りをした室を設け、4 席ずつ 2 セットを配置した。グループ学習の場合、話し声等で近くの閲覧者に迷惑をかけることになりがちである。この室は静かに閲覧するところとは区別されていて、事前の申込みの必要はなく、自由に利用できる。

(4) 情報検索室 受付カウンターの横の室で、電話回線を用いて、オンラインで情報検索を行うことができる。現在は JOIS(日本科学技術情報センター)と DIALOG(米国ダイアログ社)の 2 つのシステムを利用できる。

<2 階>

(5) 学術雑誌エリア 新設部に、国内外の学術雑誌が新着誌で約 400 種、バックナンバーで約 20,000 冊利用できるようになっている。

(6) 二次資料エリア 既設部に、逐次刊行されている抄録誌・索引誌が配置されている。

(7) コピー室 新・既設の接点部に当たる所に文献複写用の機械を置いて利用できるようにした。

(8) 演習室 従来の自習室を目的別に選別利用できるようにした。学生同士で学習の場合は 1 階グループ学習室を用い、演習室は教官等を交えた利用とする。

(9) 視聴覚室 8 m/m、16 m/m、スライド等を用意、座席数は 69 席となっている。

<その他>

(10) ロッカー・ブラウジング 従来と同じ玄関入って右側の所である。カバン類は全館持ち込みできないのでこのロッカーを用いることとする。

(11) 雑誌・美術書コーナー 週刊誌・グラフ紙以

外の一般雑誌および美術書等の大型本を配置した。

(12) 喫煙コーナー 新設部分の階段室内に数席設けた。

3. 開館時間・貸出制度

図書館の利用については(i)「静岡大学附属図書館規則」(ii)「同利用規程」(iii)「同浜松分館閲覧の手続等に関する細則」において必要な事項が定められている。そのうち、従来の規程から変更された主な項目として開館時間と貸出制度を別表にて紹介する。

(1) 開館時間 いわゆる延長開館を実施することによって次の通りとなる。

区 分		開 館 時 間
平 日		9:00~20:00
土 曜 日		9:00~17:00
各季の 休業期間	平 日	9:00~17:00
	土曜日	9:00~12:30

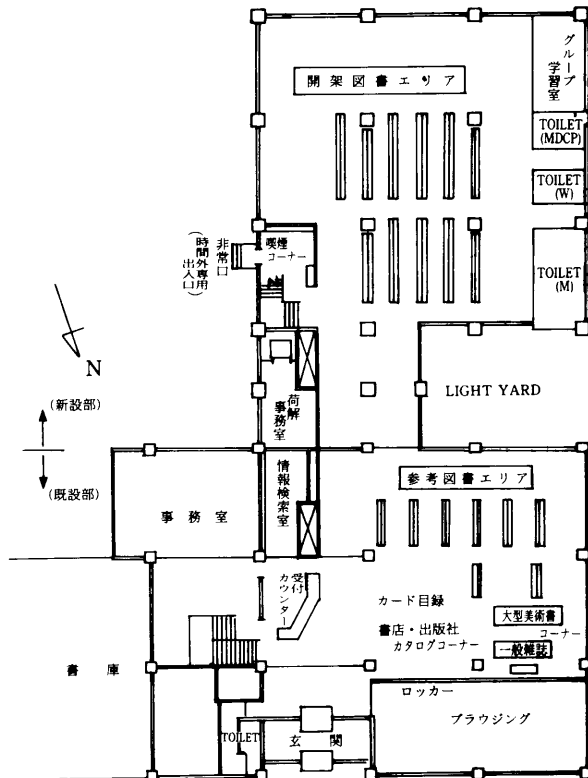
(2) 貸出

区 分	冊 数	期 間
教 職 員 生 大 学 院 生	10 冊 以 内	1 カ 月 以 内
学 部 生 等	5 冊 以 内	1 週 間 以 内

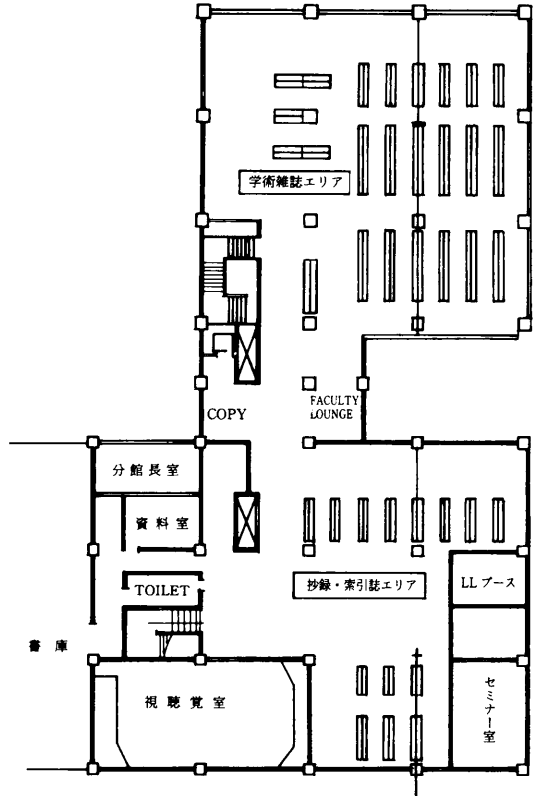
(3) その他 学術雑誌の集中化に伴って、時間外にも特別に図書館を利用できるよう磁気カードによる入館管理システムを導入した。

増築工事、雑誌集中という大きな事業を短期間に行い、明るくて立派な浜松分館ができあがりました。紙面をお借りして関係者の皆様に御礼申し上げます。今後はいよいよ浜松分館のスタッフの手で育て上げていく段となりました。限られた人員と能力ではありますが、レファレンスサービスの強化や事務処理のスピードアップなどによって、着実な機能向上を目指していきたいと思っています。よろしくごお願い申し上げます。

1 階 配 置 図



2 階 配 置 図



私のすすめたい本

多門院和夫

“私のすすめたい本”という題で何か書けとの依頼に、つい気軽におひきうけたものの、農業経済という仕事柄、毎日を本に囲まれて生活しているためか、かえって迷ってしまい、4～5カ月も過ぎてしまいました。

この拙文の主な対象読者を、誰にしぼろうか、“本”の中には、参考書や教科書風のものも含まれるのか、本の数は単数にしようか複数にしようか、一つの体系についてだけにしようか、幾つもの体系にまたがらせようか、などと迷っているうちに、火急の用件にふり回されて、ついさらに遅くなって。

迷っていても気が重くなるばかり、ひとまず農学部の諸君を中心に、工学部・理学部など理系の諸君を主な対象とすることとし、鉛筆の動くまま、気のむくままに書くことにします。この通信が発刊されるのは4月頃だと思いますので、まず、新入生・新三年生の諸君に、入学・進級おめでとうと祝辞を捧げたいと思います。

さて、資本主義とか社会主義といった国家の体制にかかわりなく、科学が進歩し、経済が成長するにつれて、社会はますます職業人としての人間の専門化を強く求めるようです。専門化は、きびしくいえば畸形化を招きがちです。そこで、“私のすすめたい本”の最初に、文学書・哲学書をあげたいと思います。とくに、新入生の諸君は、教養部の時代に、幅広く文学書をお読みになることをすすめます。私は、学生時代、病気療養期間中に随分と本を読みました。いま回想して、病気もまんざら悪いものでないと思います。

農学部の諸君は、ほとんどすべて理系の研究室に進まれるでしょう。しかし、卒業後の進路をみると農林水産省・県市町村等へ就職されても、経済政策の一環である農政を担当されるのが一般的ですし、会社でも営業や企画などのポストに就かれる方が多いようです。試験・研究機関で純粋に理科系の研究生活を送る人も、やがて管理職になると、経済学や社会学の知識が必要となってきます。理・工・教育の諸君についても、かなり似た事情があるのではないのでしょうか。そこで、経済学畑の本について紹介することにしましょう。

われわれには、“経済”を意識しないで生きるこ

とは困難です。したがって、経済学についてはある程度の知識は常識として誰もが心得ています。そこで、経済学は正規に学習しなくても理解できるという誤解が生まれがちです。むしろ、ある程度知っているから、かえって判りにくいというのが経済学ではないでしょうか。農学部では、食料経済学・農政学・農業経営学などが開講されていますが、これらを十分理解して貰うためには、経済学の基礎的素養が欠かせません。そこで、経済学を独学で勉強される方におすすめしたい本を紹介します。馬力のある諸君には、サミュエルソン***経済学**（岩波書店）が適当でしょう。やや冗長とも思われるほど、事例的な説明もされていますので骨組みだけの本よりは、かえって読みやすいというのが定評です。読むのは大変だが、わかる、頭に入る、という種類の本です。初心者にはわかりやすいという意味で、千種さんの***経済学入門**（同文館）もよい本といえましょう。寮やサークル等で実力のある先輩に恵まれている人は、新開さん他の、***近代経済学**（大学双書）や、森嶋さん他の、**経済学入門**（有斐閣）等が好適と思われます。この他、ケインズ経済学を学びたい方には、伊東さんの***ケインズ**（岩波新書）、やや古いが、ディラードの***J・M・ケインズの経済学**（東洋経済）などがあります。積極的に産業連関論を学びたいという方があれば、宮沢さんの、**産業連関分析入門**（日経文庫）が秀逸だと思います。この分野でも、随分多数の著書が公刊されていますがそれらと比べて、文庫本とは思われない充実した内容の本といえます。私は、経済原論の専門家ではありませんので、以上の選択が果たして妥当か否かについてはあまり自信はありませんが、専門課程に諸君の先輩を迎えて、常日頃感じていること……この程度は読んできて欲しいという素直な気持ちで、私のすすめたい本としました。

つぎに、農協問題や社会問題に関心のある諸君にすすめたいのが、ボールディングの***組織革命**（日経新聞）です。今井さんの、***内部組織の経済学**（東洋経済）も、組織問題に経済理論的アプローチする上で興味があり、文献解説的な意味で役立つのが野中さん他の、***組織現象の理論と測定**（千倉書房）、実用的に興味があるのは、ベン・ヘアーズ他の、**組織の知的生産力**（学研）などで、最近の組織論の発展は目覚ましいものがあり、これらの成果を諸君が吸収し、活用されることを期待します。

過剰と飢餓の同時併存という矛盾、将来の食料危機の実相とそれへの対応等を知る手がかりとして、アメリカ農務省特別白書、***食糧超大国**（家

の光協会)、H・リンネマン、*21世紀への世界食糧計画(東洋経済)、ダン・モーガン*巨大穀物商社(日本放送出版協会)、A・N・ダックハム*人類の食糧・農業システム(農林統計協会)、吉田忠*食糧の経済(ナカニシア)などがありますが、*農業と経済、農林統計調査など、専門誌をお読みになることをおすすめします。(農学部・農業経営)

*印は本館所蔵を示す。

「旧制静岡高等学校蔵書と漢書 書名リスト」作成について

旧制静岡高等学校の蔵書は静岡大学に受け継がれ、現在附属図書館に所蔵されている。この蔵書は小規模ではあるが、今となっては入手し難い図書もあり、それなりに貴重なコレクションである。この図書は門別分類(以下、旧分類とする)されて、静岡大学旧文学部(現人文学部・理学部の前身)当時の昭和25年度までの図書も旧分類で整理されているので、これに含めた。その蔵書数は戦災による亡失分等を除いて約34,700冊である。

これら図書(旧分類図書とする)の目録は、不十分ながら和漢書は分類と著者名の目録があり、洋書は分類目録があった。洋書については昭和52年に分類目録カードを複製して簡易な書名と著者名の目録を作成した。和漢書についても目録の整備が課題となっていたが、日常業務の量的増大と予算確保の困難さで目録の作成に踏み切れなかった。また、分類・書名・著者名の各目録の製作は現状では至難であり、分類については、分類簿を複製製本したものが作られており、著者名目録も不完全ながら一応整っているため、より要請が強かった書名目録を作成することにした。そのために、分類目録カードを書名順に編成替えし、書名目録の作成を果たそうと思ったが、目録記述が不備ゆえに検索で最低限充たす一行一覽性の簡略な書名リストを作成することにした。このリストの対象図書は、旧分類図書の和漢書と洋書に区分されているが、今日の観点からみて和漢書と思われるものと、原簿に記載されていない教科書、副読本等の和漢書を含めた総数約26,400冊である。(逐次刊行物は『静岡大学雑誌目録と文編』に収録されているので除いた。)

このリストは書名をローマ字の訓令式で読みABC順に配列したものである。書名は単巻ものの書名は勿論、叢書・全集等の多巻ものの総合書名、

それらの各巻の書名、それに収録されている著作の書名を必要と思われるもの。また、冠称を付した書名、冠称を省いた書名などの書名とみなされるものも記載した。一図書の複数著作の書名はそれぞれ記載したが、その際配列対象の書名を大きく書き、他の書名は小さく書き、図書の収載内容をまとめて示し、多少ブラウジング機能を持たせるようにした。記載した書名には煩を厭わず、著者名・発行所・発行年・請求記号を逐一記述し、参照で導かずその場で必要事項が分かるようにした。

なにもぶんに日常業務の合間や残業による作業であり、調査や校正が十分に行えなかったうらみがある。このリストを利用してお気付の点があれば指摘していただき、今後、一層充実した目録の完成の糧にしていきたい。なお、分類や著者名の目録または索引は機会があれば取り組みたいと思う。(整理係)

■図書館委員会報告

昭和57年度 第7回 S 58. 2. 9

議事

- 1 「静岡大学附属図書館浜松分館閲覧の手続等に関する細則」について、審議の結果、原案どおり承認し、昭和58年4月1日から施行することとした。
- 2 図書館業務の電算化にあたり、図書館業務電算化委員会(仮称)の設置について、各部局からの検討した結果の報告にもとづき、種々審議の結果、同委員会は図書館委員会の下部機関であることを確認し、「同委員会要項(案)」を一部修正のうえ、一部の部局から、これをもとに部局内で更に検討したいとの意向があり、次回委員会で再度審議することとした。
- 3 館長から、オマハ校附属図書館長ロバート・エス・ラニアン氏から、オマハ校との学術資料の交換について意見交換するため、本年6月頃、来学したい旨の書信が寄せられ、この問題の処理にあたって、国際交流委員会と図書委員会との関連について、学長と話し合った経緯につき説明があった。

■教官著作寄贈図書

重田澄男(人文学部)

「資本主義の発見—市民社会と初期マルクス—」
(御茶の水選書) 重田澄男著 御茶の水書房
1983 (331.34/sh 29 開架)

中山葉子(教育学部)

「生活技術—その人間に及ぼす影響—」 中山葉子著 日本出版センター 1982 (590/N 45 開架・閉架)

(4ページへつづく)